

[ちくほう地域研究]

日満学校旧蔵油絵の来歴
と背景筑豊地域研究会会員
牛嶋 英俊

1. 直方三中の油絵

市立直方第三中学校の校長室には、永年にわたりカ
ンバスに油彩の大型絵画が掲げられている(写真1)。
これは旧満州(中国東北区)の風景といい、同校の
前身である九州日満工業学校(以下、日満学校)の旧
蔵品と伝えるが、その根拠や伝存の具体的な経緯につ
いては従来よく知られてなかった。また描かれた内容
についても、たんに「満州の農村(または田舎)風景」
という口伝のみであった。

今回、同校に保存されている記録をくわしく拝見し
たことをきっかけに、今日にいたる絵の来歴とその背
景について若干の知見を得ることができた。

絵の寸法は縦89センチ、横115センチあり、これ
に木製の額縁を加えると、116・5センチ×142
センチの大型品となる。

描かれているのは、中国農村の風景と思われる。画
面手前に集落、背景には樹木のない陰阻な山並みが広



写真1. 直方三中蔵の風景画

がる。山すそには長城の城壁が見え、建物の形などと
考えあわせると、場所は旧満州南部、中国東北地方の
辺境であるらしい。

村落内の草木は若葉色であり、季節は早春だろう
か。建物の影は長く、山肌にも陽が照り映え、時刻は
夕方のようなだ。

村内では子どもまたは女性を乗せた驢馬を曳く男性
がこちらへ歩いており、後方には背をまるめて天秤棒
をかつぐ人のほか、いずれも農民と思われる数名の人
物が遠近をちがえて配置されている。概観して、おだ
やかな農村風景の印象をうける。左下には「栄楓」の
サインがある。

2. 作者劉栄楓について

絵の作者栄楓こと劉栄楓は、明治二十五年
(一八九二) 神奈川県で生まれた。父の劉雨田は日本

に帰化し、陸軍大学校・陸軍経理学校で教授を務めた
中国系日本人である。栄楓は独学で洋画を学び、文展
や大正博覧会などに出品した(註1)。

文展入選作は

「朝の居住地」大正三年(一九一四)

「満州」「うすれ月の漁村」大正四年(一九一五)

「満州の宿」大正六年(一九一七)

などで、満州にかかわる画題が多い。とくに「満州の
宿」はのちに「皇室の御用品となった」という(註2)。

またこのほかに

「浴後」「母子」昭和二年(一九二七)

など、女性を描いた作品も知られている。

文展資料には当時の居住地は神奈川とあるが、一方
で日本と旧関東州(遼東半島南部)を往復していたと
いうから、この地方と関わりが深い人物であったよう
だ。昭和十二年(一九三七)に満州国首都の新京(現
長春)で開催された第一回訪日宣詔記念美術展覧会
では新京の地方美術代表を務めており、翌年の第一回満
州国美術展覧会(以下、満州国展)が開催された昭和
十三年(一九三八)ころには新京に定住していたらし
い。

満州国展は、新京で第一回が開かれた美術展覧会
である。出品者を満州国とこれに隣接する関東州の居住
者に限定し、日本の敗戦により満州国が瓦解する昭和
二〇年(一九四五)の第八回まで開かれた。主催は満
日文化協会、後援は満州国文教部となっていたが、実
質は満日文化協会が国の委託をうけて実施した国営の
事業であった。したがって、その内容も文化国家の体
裁を整えるための政策的な面が強かったとされる。

劉栄楓は第一回から第四回まで出品し、第一回では
新京の地方美術代表、第二回・第四回展では美術委員
を務め無審査出品であったから、現地美術界で重きを



写真2. 劉榮楓「満州の収穫」・星野桂三氏提供

なした人物と推定される。

この間、劉は大連（中国遼寧省）や日本国内でしばしば個展を開催、昭和三年（一九二八）には「劉榮楓画伯洋画展覧会」が開かれた。昭和五年には満州の穏やかな農村風景を描いた「満州の収穫」が知られている（註3）（写真2）。

「満州の収穫」は広大な満州の平野で収穫する現地の農民を描いているが、この作品について星野桂三氏は

「絵の構図そのものは、ミレーの〈落穂拾い〉を下敷きに、同じミレーの〈昼休み〉という作品をドッキングさせ、ポスト印象派風に染まった発展途上の日本人画家の手荒いタッチを加えると、このような満州風景になる」（註4）と評している。日本の西洋画史における劉榮楓の位置づけが見て取れよう。

収穫する農民の背景には虹が立つが、満州を描く絵

画における虹には特別の意味をもつとの指摘がある。

千葉慶氏は、第七回文展（一九一三）に出品された辻永の風景画「満州」にかかる巨大な虹について、「農地にかかる虹を描いたジャン・フランソワ・ミレー『春』を反転してほとんどそのままトレースしたような」構図で、そこに描かれた「虹はそれだけでも希望を連想させる記号であるが、そこに『満州』の名が冠されることで、この絵画は『満州へ行けば希望が待っている』というメッセージを発信することになる」とし、見る人に満州を「約束の地」「理想郷」との印象を強く与えた、と読み解いている（註5）。

以後、一九一〇年代の文展・帝展・新文展などの中央官展では、劉榮楓の「満州」（一九一五）、山本森之助「満州の一部」（一九一七）など、満州を題材にとった作品が出品される。

昭和十七年（一九四二）の満州国展で民生大臣賞を受賞した齋藤栄一の「歡喜嶺の二重虹」について、江川佳秀氏は新京南郊の歡喜嶺には建国忠霊廟や建国大学があり、そこは満州国建国と将来を象徴する場所であったと指摘、「この作品に描かれた虹はただの雨後の虹ではなく（中略）満州国の前途を祝す虹と映ったはずだ」とする。

これらを踏まえて「満州の収穫」を見ると、そこには「満州は希望の大地」という賞賛のメッセージが見えてくる。中国系ながら、劉榮楓は日本の満州進出に對して肯定的な立場であったようだ（註6）。

後述するように日満学校旧蔵の絵が昭和十七年の寄贈とすれば、劉榮楓が満州国展に出品をしていた時期、作者五〇歳のときにあたる。また、満州国瓦解後の劉榮楓の消息や没年は不明である。

3. 日満学校と油絵寄贈の経緯

絵が第三中学校に伝わった経緯については、同校所蔵の『沿革史』に記述がある。同書は「福岡縣直方市立直方第三中学校」名入りの縦書き野紙（の電子コピー）を袋とじて白表紙を付し、紐でつづった見開きB4判のもので、表紙に「沿革史」「直方市立直方第三中学校」、表紙裏（見返し）に「昭和十四年四月二十日 九州日滿鉦業技術員養成所として創立」「昭和四十七年十二月十五日作成」との墨書がある（註7）（写真3）。

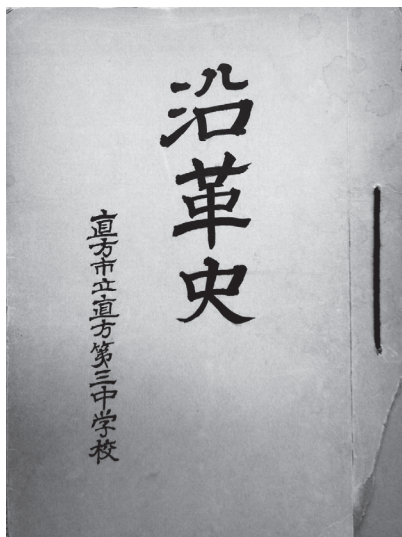


写真3. 「沿革史」・直方第三中学校蔵

内容は、日満学校から市立第三中学校にいたる沿革を年代順に記述したものである。ただし、野紙に「縣」「學」の旧字が使われているので「昭和四十七年十二月十五日作成」はタイプ印字の年代ではない。本文三頁に「現在の直方三中の校舎」とあるのを見れば、原本の作成は日満学校が市立直方第三中学校（新制）に改組された昭和二十二年以降の、これに近い年代と推定される。その後何らかの事情でこれがコピー・製本されたのが「昭和四十七年十二月十五日」と考えてよいだろう。用紙やコピーの状態も、電子コピーが普及しつつあった昭和四十七年当時のものと推定できる。

このときの作成者は不明だが、原本の作成は当時の事務職員の松田薫ではないかとの証言がある(註8)。
『沿革史』昭和十七年(一九四二)四月の条には、以下のような注目すべき記述がある。

「昭和十七年四月廿六日 本溪湖煤鉄公司の炭坑大爆発により三月に渡満した採鉱科生徒九名殉職す。(日本人で殉職したのは殆んど彼らのみであった)」

昭和十七年五月中旬 寮二棟完成する。生徒を全部寮に収容する。

昭和十七年五月下旬 遺骨を迎えて 本溪湖の爆発による殉職卒業生の慰霊祭を行う」

この欄外に赤字で、

「第二期生の保護者が追悼の念をこめて母校に寄贈したのが、校長室の絵画である。H 4. 1. 30」

との手書きの追記がある。これによれば、三中伝存の絵は「本溪湖の爆発」で殉職した卒業生九名の追悼のために、保護者から当時の日満学校に寄贈されたことが知られる。寄贈の時期は不明だが、あるいは慰霊祭がおこなわれた昭和十七年の五月下旬を過ぎたころだろうか。

日満学校は、昭和十三年(一九三八)に財団法人日満技術工養成所(十五年に「財団法人日満鉱工技術員協会」に改称)により、直方市知古に設立された。養成所の所在地は東京の満州国大使館内にあり、この組織が満州国の運営であることが知られる。

当初「九州日満鉱業技術員養成所」として発足し、昭和十九年に「九州日満工業学校」と校名変更した。設立目的は、昭和七年に成立した満州国の「地下資源の開発と工業の振興を図」り、「満州国開発の技術者

を養成」するとあり、満州国の国策にそったものであった(註9)。

また校舎の建築設計は東京前川建設事務所、工事請負は福岡市の清水組であった。前川建設事務所は、建築家として知られる前川国男の事務所であり、日満学校は彼の設計によるものである(写真4)。



写真4. 旧日満学校の校舎・「日満第一回卒業アルバム」より

その後、昭和二十年八月、日本の敗戦で満州国は崩壊し、日満学校も機能を停止した。戦後の二十一年四月には財団法人筑豊鉱山工業学校として復活開校し、同年十一月には市内にあった筑豊鉱山学校と合併した。

二十二年(一九四七)七月には学校敷地と施設を直方市に移管、跡地は直方市立直方第三中学校(新制)となり、筑豊鉱山学校は昭和二十三年四月に新製の筑豊鉱山高等学校として市の東部に開校した。その後はいくつかの変転をへて平成十七年(二〇〇五)三月に県立鞍手竜徳高等学校に統合された。

日満学校第一期の入学生は、鉱山科七十名・鉱山機械科三十名の計百名であった。原則としてその一割は満州・朝鮮からの留学生とされた。学生生活は全寮制で、起居動作はすべて軍隊式におこなわれた。

一期生は三年後の昭和十七年(一九四二)三月上旬に卒業した。卒業アルバムによれば、卒業生九十三名のうち満州国出身者十六名(うち一人は日本人)、朝鮮半島出身者が四人含まれている(一名は判読不能)。彼らは一週間のみじかい準備期間のあと、鉱山科六十三名、鉱山機械科二十七名が就職先の満州に渡った。一ヶ月後、このなかの九名が殉職することとなる。

4. 本溪湖煤鉄公司の炭坑事故

事故が起きた「本溪湖」とは、遼寧省本溪湖(現本溪市)にあった本溪湖煤鉄公司をさす(写真5)。その始まりは明治四十三年(一九一〇)に日本の大倉

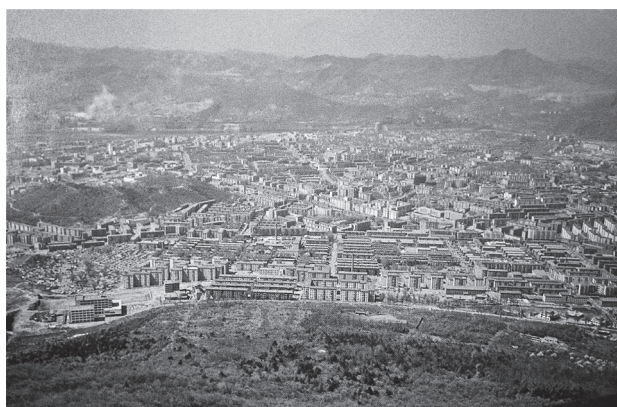


写真5. 現在の本溪市

財閥が当時の奉天省政府と合併で「本溪湖煤鉄公司」を設立したことによる。翌年、石炭採掘のほかに製鉄もおこなう「本溪湖煤鉄公司」と改組、大正四年（一九一五）には高炉の操業を開始した。良質の鉄鉱石と原料炭から生産される鉄鋼は精密機械や大口径砲に不可欠であり、日本の軍需工業を支えたとされる（註10）。

事故は昭和十七年四月二十六日の十四時五分に起きた。地下一〇〇メートルにある炭業部一卸坑の採炭現場とこれに通じる地下電車坑道（柳塘坑道）附近でメタンガス爆発と石炭の粉塵による爆発事故が起こり、坑内火災が発生した。『沿革史』のいう本溪湖の爆発とはこの事故をさす。

このとき、一酸化炭素中毒などにより多数の労働者が死亡した。死者数は諸説あり、本溪湖煤鉄公司の事故報告書では社員三十四人（日本人三十一・満州人三）とするが（註11）、関係者の記録には多少の食い違いがある。現場にいた満州製鉄労働部長の沖永健三は「入坑人員二〇〇余人の内一五〇〇人の犠牲者（内日本人三三人）」とのべており（註12）、日満学校の卒業生もこれに含まれる。またのちに撫順戦犯管理所での話では一八〇〇人以上とされている（註13）。

直接の事故原因について、沖永は「停電による電気操作の誤で炭塵爆発」とするが（註14）、その背景には石炭増産のために安全設備が不十分であったとの指摘がある。いづれにしても当時から今日にいたるまで、世界的にも屈指の規模の炭鉱事故であった。ちなみに日本国内最大の炭坑爆発事故として知られる三井三池炭坑（大牟田市）の死者は四五八人である。

死者が多数にのぼった原因について、坑内火災が発生したため「日本人の採炭所長が坑内への送風を中止し入口を封鎖した」との中国側の主張があるが（註

15）、当時の労務部長沖永健三は迅速な救援活動がなされたとし、事故後の対応についてはむしろ敗戦後に中国軍から褒められたと述べている（註16）。

事故の報告書をもいても、数次にわたり救援隊が入坑したことが知られ、「送風を中止した」のはむしろ一酸化炭素の坑内拡散をふせぐためであった（註17）。

日本人死者の遺体は南山俱樂部に安置され、通夜が営まれた。あまりにも多数の死者に火葬が間に合わず、遺体は彩家屯の太子河原で荼毘に付された。このときの写真には、一列に並んだ棺と立札状の名札が痛々しい（写真6）。



写真6. 太子河原で荼毘に付される殉職者・註10文献

翌朝、本溪湖の電報電話局には電報の発信が殺到した。午前四時をすぎたころ、息をはずませて来た来客が「〇〇（人名）タンコウジコデシンダ」アトフミ」という五、六通の電報を差出した。その後も電報の依頼がつづき、たちまち五〇通あまりとなった。

六時すぎには憲兵が来局し、「以後はタンコウ・ヤマ・バクハツ・ジコなどの語句のあるものは受付けないように」と指示をした。

局員は総動員で電報を処理し、八時三十分までに二百通ちかくを発信したが、まだ五十通あまりの未処理電報があったという（註18）。当時は戦時下のため報道管制はきびしく、日本国内の新聞発表は一週間後の五月二日であり、死者数など事故の詳細が判明したのは戦後のことである。

ちなみに、このとき本溪湖炭坑に就職していた日満学校鉱山機械科一期生荒木節男^{さだお}の直方市山部の実家に「サダオダイジョウブ」との電報が届いた。突然の事に家族は事情がわからずにいると、後日新聞に事故のニュースが載った。荒木は事故のとき機械の操作で抗口にかくにいたためすぐに脱出して助かったが、鉱山科出身の友人が多く死亡した、と語っている（註19）。事故後、九州をはじめ中国・四国・東北・北海道など日本各地の遺家族に連絡がとられた。遠隔地のため、全員が現地に集合するのに五日から七日ほどかった。現地合同葬儀のおりと思われる九つの遺骨と遺影を抱いた同僚らの写真がある（写真7）。

また五月下旬、直方市の日満学校で「遺骨を迎えて、本溪湖の爆発による殉職卒業生の慰霊祭を行」ったのは先に『沿革史』に見たとおりである。

今日、本溪市郊外の山上に当時の日本側による慰霊碑「永劫不朽殉職産業戦士之碑」が現存し、周囲は事故死した中国人労働者の集団墓地ともなっている。溪湖区人民政府による「市級文物保护单位・肉丘墳」として整備され、二〇〇〇年六月には「愛国主義教育」の石碑が建てられた。



写真7. 現地での合同葬儀・荒木フサ子氏提供

5. 日満学校旧蔵の油絵とその時代

以上、直方第三中学校所蔵の油絵について、その作者と作品の来歴を見てきた。中国系日本人の作者は、五〇代のころから当時の満州国に在住して画作活動をおこない、現地の洋画界に重きをなしていた。未確認ながら、満州国政府直属の財団法人日滿鉦工技術員協会ともつながりをもつ人物であったらしい。

作品が日満学校に寄贈された直接の契機は、卒業生の殉職事故にある。なかでも劉栄楓の絵が選ばれたのは、満州における劉の親体的な立場によると思われる。絵の主題は炭鉱とは無縁にみえる平和な農村風景であり、とくにこの事故に関して描かれたものではなく、既存のものが贈呈されたのではないだろうか。想像をめぐらせば、殉職生徒たちが生前の日常で目にしていた絵であるのかもしれない。

栄楓が満州に定住した一九三〇年代は、日本が大陸



写真8. 「日満学校」記念碑・直方第三中学校内

に権益を求めて進出し、中国東北地方に傀儡政権を建国した時代にあたる。直方市に日満学校が設立されたのも、この時代の日本・満州両国の要請に応えたものであった。その結果、多くの青少年が大陸に渡り、やがて敗戦に遭遇して悲惨な境遇に陥ることとなった(註20)。

以来七〇年余。その間、絵は敗戦や日満学校の解体、新制中学校への移行など、いくつかの混乱期を乗り越えて今日に至っている。今年は終戦から七〇年の節目の年にあたるが、一枚の油絵の背景にある、日本の大陸進出とその挫折という、近代史の側面を地域史の視点から再考してみるのも意義のあることかと思われる(写真8)。

本稿をなすにあたり、直方第三中学校校長橋本淳生氏には絵画調査の便宜と資料のご教示を頂いた。京

都・星野画廊の星野桂一氏からは「満州の収獲」はじめ、劉栄楓の作品資料の提供を頂いた。日満第一回卒業生の故荒木節男氏夫人フサ子氏からは爆発事故をはじめとする貴重なお話を伺い、卒業アルバムを拝見させていただいた。記してお礼申し上げます。

(うしじま えいしゅん)

註1 劉栄楓の履歴については、多くを以下の文献によった

江川佳秀「作家・作品解説 長春 劉栄楓」『官展にみる近代美術』267頁 福岡アジア美術館ほか 2014

註2 星野桂三「石を磨く」54頁 産経新聞ニュースサービス 2004

註3 註2文献53頁

註4 註3におなじ

註5 千葉 慶「不安と幻想―官展における〈満州〉表象の政治的意味―」『人文社会科学研究科プロジェクト報告書第175集』千葉大学大学院人文社会科学研究科 2008

註6 一部未確認だが、劉が描いた50号の作品が東京の財団法人日滿鉦工技術員協会の講堂に掲示されていたとの情報がある。日満学校こと財団法人日滿技術工養成所も満州国政府と密接なつながりをもつ組織であったから、本溪湖事故遺族の絵画寄贈の件と考えあわせ、劉と満州国政府との関係が何われ、興味深い。http://plaza.rakuten.co.jp/nyankoroom/diary/201108310001/ 名称を「直方市立直方第三中学校沿革」とする文献もあるが、これは同書第一頁冒頭の表題による

註8 第一期卒業生井上光彦によれば、戦後日満学校の土地と施設が直方市に移管されたとき、創立当初から事務の全般を取仕切ってきた松田薫が「自分の記録簿から直方第三中学校の原稿用紙に書き残し」とと思われるという。隈部智雄・原

- 正敏「戦時下、技術員・技能工養成の諸局面
(3)」『千葉大学教育学部研究紀要第39巻第2部』
176頁1991
- 註9 直方第三中学校敷地内の「日満学校跡地碑」銘
文による
- 註10 本溪湖鉄鉄公司以生産された低燐鉄鉄の納入先は
海軍工廠四割・他の軍需工場四割・民生用二割と
推定され、海軍工廠のなかでは呉海軍工廠が圧倒
的に多かったという。「太子河」編集委員会『太
子河・満州本溪湖100年の流れ』114頁
本溪湖会1992
- 註11 株式会社本溪湖鉄鉄公司『本溪湖炭鉱○災害故報
告書』康徳九年(一九四二) 註10文献 235
頁
- 註12 沖永健三「炭業・労務・病院の協力」註10文献
234頁
- 註13 李秉剛(元遼寧政治経済学院・中共遼寧省委党校
教授)の説明による 青木茂『万人坑を訪ねる』
90頁 緑風出版2013
- 註14 註10文献 234頁
- 註15 註13文献 89頁
- 註16 「敗戦後中共軍から三回(計約三〇余日)勾留さ
れ、厳しい取調べを受けたが、この爆発事故につ
いては殆ど尋問も無く、事件後の処理、殊に医療
の救援が良かったと却って賞められたほどだっ
た」註10文献 235頁
- 註17 清水清「身命賭して救助活動」註10文献
233頁
- 註18 熊谷英雄「悪夢の朝」註10文献 233頁
- 註19 荒木節男氏の妻フサ子氏による
- 註20 日満会編『追憶・ああ地平線に陽は落ちて・満州
動員学徒の青春』1998